

インターディスクルス分析、娼婦バビロンを例にして

小笠原能仁

ワイマール時代に広く流布した Intertext として、ヨハネの黙示録の「娼婦バビロン」*die Hure Babylon* が挙げられる。聖書では、娼婦に喩えられた大都市バビロンがその非道徳性を神から叱咤され、没落し、その後聖なる都市エルサレムが再建されるという筋になっている。この先行テキストはデーブリーン、ホフマンスタール、リルケ、シュペングラー、ベッヒャーといった異なった流派にまたがって使用されており、ベルリン等、資本主義工業社会に成立する大都市の描写に使われている。

しかしここで文学研究上の問題となるのが、はたしてこれらの作家が「娼婦バビロン」を細部において同一の意味で使っているかという問いであり、それをどのような方法で明らかにするかである。この問いにユルゲン・リンク教授の Interdiskurs 論を応用する。「娼婦バビロン」の意味内容を細分化すると、テキスト構造が「大都市の経済的豊かさ」、「大都市の醜さ」、「大都市生活の非道徳性」、「犠牲者としての都市住民」、「大都市の運命的な没落」、「語り手の安全な立場」という、6つの独立したテーマから成り立っていることがわかる。「娼婦バビロン」を使っている作家は、おおまかに新古典主義、反大都市主義、表現主義大都会詩の3つに分けられるが、この3者の違いとは、この6つの聖書の構成要素からどれを選び、受け継いでいるかによる。新古典主義では「娼婦バビロン」の社会的政治的側面は考慮されておらず、美的な視点から大都市を見ている。反大都市主義は聖書の構成要素のすべてを受け継いでおり、さらに「近代化の場所としての大都市」、「都市と農村の対比」、「文化悲観論」というアクチュアルな文化批判を付け加えている。表現主義大都会詩は聖書の構成要素の5つまで反大都会主義と共有しているが、大きな違いは「語り手の立場」で、反大都市主義には安全な場所から都市の没落を見届け、後世に伝えるという黙示録の語り構造がそのまま当てはまるが、表現主義大都会詩では語り手自身が都市とともに没落するといった救いのなさが、悲愴感をより強めている。

デーブリーンの『ベルリン アレキサンダー広場』では「娼婦バビロン」が引用されているだけでなく、「娼婦バビロン」の意味内容にそって、ベルリンの都市生活が描写されている。ショーウィンドーの美しさは都会の豊かさを象徴し、多数登場する娼婦は都市生活の非道徳性を明らかにする。失業と住宅難を報告することで都市住民を犠牲者として描き、死亡者数が新生児数を上まっているベルリンの人口統計を示すことで、ベルリンの運命的な没落を強調している。しかし「運命的な没落」にデーブリーンは修正を加えている。「歴史上の大都市ローマ、バビロン、ニネベは崩壊したが、人間は再度新しい大都市を建設してきたのであり、また未来において復興活動は終わらない」という活動の原理を平易な言葉で表現し、庶民の生活の知恵として、宗教的ペシミズムに対比させている。聖書の救済史の一回性を「破壊と再生の永遠な連続」に改作しており、「歴史が終わる」と考える呪術思想的終末論を近代的思考である時間の無限性に置き換えている。